

沙耶は高校に入学してから電車通学をしていた。

毎日同じ時間に、いつもの場所に立つ。電車に乗っているのはほとんどが制服姿の学生で、沙耶と同じ高校の制服を着ている人もちらほらと見かけた。特にすることもないのでスマホをいじっていればあつという間に学校に着く。平凡な日常。そんな中、一つ悩みがあった。

(まただ……)

お尻に何かに触れる。最初は気のせいだと思っていたが、今は違うとはつきりわかる。痴漢されているのだ。それも何度も。

(なんなの……)

気持ち悪いし恥ずかしいし最悪だった。この手の犯罪はなくならないらしい。

沙耶も被害に遭うまで知らなかったのだが、こういう行為は本当にあるようだ。

今まで何度か助けてもらおうと思ったことはあった。しかしいざとなると言い出せないもので、結局我慢するしかなかった。それに最近は触り方が少し変わってきた気がした。

最初の頃は手や腕を使って触っていたのに、今ではスカートの中へ手を突っ込んでくるようになった。下着越しとはいえ、その感触はかなりリアルで、思わず声が出そうになるくらいだ。幸いにも周りにはバレていないようだったが、もし誰かに知られたらと思うと怖くて仕方がなかった。

(どうして私がこんな目に遭わなくちゃいけないんだろう……)
涙目になりながらそう思うことしかできなかった。

そんな日々が続いたある日のことだった。

「っ……!?」

いつも通りお尻に触れたあと、今度はパンツの中に直接手が入ってきた。

初めて感じる感覚に体が硬直して動かなくなる。それでも手の動きは止まらず、割れ目をなぞるように指を動かされる。そしてついに秘部へと触れられる。ぬるっとしたものが塗られたような感じがしたあと、指先がゆつくりとナカへ侵入してくる。誰にも助けを求められない状況でただ恐怖に耐えるしかなかった。

やがて指が奥の方へ進むと、中を探るように動き始める。すると、とある一点を掠めた瞬間ビクッと反応してしまった。

痛みと圧迫感に苦しんでいると、腰を掴まれて思い切り揺さぶられ始めた。

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッ！！♡♡♡♡♡

どちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅんどちゅん♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「~~~~~っ♡♡♡♡♡」

悲鳴が漏れそうになり、咄嗟に口を抑える。だが男はそんなことお構いなしといった様子で突き続けた。

ばちゅんっばちゅんっばちゅんっばちゅんっばちゅんっばちゅんっ♡♡

「~~~~~っ♡♡♡♡♡」

男が限界を迎えそうになったのか、さらにピストンが激しくなる。沙耶の体もそれに合わせて痙攣し、絶頂を迎える準備を始める。

ばちゅんっ！！♡♡♡♡♡びくんっ！！♡♡♡♡♡
「~~~~~っ♡♡♡♡♡」

ドピュルルルルルルッッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

お腹の奥へ熱いものが流れ込んでくる。それと同時に自分の体がビクビクと震えるのを感じた。ずるりと男根を引き抜かれると、どろっとした白い液体が垂れてくる。

「はあっ……はあっ……」

手すりにしがみつき息を整えていると、電車のアナウンスが鳴る。高校の最寄駅だ。

(やばい、遅刻する……!!)

沙耶は下着を整え、慌てて電車を降りた。

学校に着いた頃にはすっかり疲れ切っていた。

朝っぱらからあんなことをされ、何度かイカされてしまったせいで足取りは重かった。教室へ入るとすぐに机の上に鞆を置く。するといつも一緒にいる友達二人が心配そうに声をかけてきた。

「おはよう沙耶ちゃん！なんか今日元気ないね？」

「うん……ちよつと体調悪いみたいで……」

適当に誤魔化しながら席に着く。ドロリとしたものが太ももに伝うのがわかった。

(うわ、最悪……)

トイレへ行こうか迷ったが、授業が始まるまであと五分もない。諦めるしかなかった。

その日の授業は全く集中できなかった。

先生の話聞いてなくて怒られるし、しかも放課後に補修を言い渡され、ただえさえ疲れているのに泣きっ面に蜂状態だった。

(あー疲れた……)

電車の座席に腰を下ろす。いつもより遅くに乗ったせいか、電車は空いており簡単に座ることができた。

(駅に着くまでちよつと休も……)

そう思い眠気に誘われるまま目を瞑った。

それからどれくらい経っただろうか。

ふと下半身に違和感を覚えた。何かが触れているという感じではない。もっと別の、何かが這っているような感覚だった。

(なんだろう……これ……?)

最初は寝ぼけていてわからなかった。

しかし意識がはつきりしてくるにつれて、その正体がわかる

ようになってきた。

(もしかして……また痴漢されてる……!?)

恐怖で固まってしまう。

すると今度は手がスカートの中へと入ってきた。さわと指先が秘部に触れる。そしてそのまま割れ目に沿ってなぞられた。

くにゅ……♡♡♡くち……♡♡♡ぐちゅ……♡♡♡

(だめ……こんなところで気持ちよくなったら……)

抵抗しようとしても体に力が入らない。

それどころかどんどん快感を覚え始め、もうすでに絶頂寸前だった。

(こんなところでイっちゃうなんて……絶対に嫌……!)

必死に耐える。しかし体は正直なもので、徐々に高まっている